



名詞句の特定性と述語の意味

著者	三好 伸芳
雑誌名	文藝言語研究
巻	75
ページ	63-90
発行年	2019-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00154955

名詞句の特定性と述語の意味

三 好 伸 芳

1. はじめに

本稿では、文中における名詞句の「特定性」(specificity)を述語の意味的な性質との相互作用から明らかにすることを目的とする。これまで、日本語名詞句の研究において、特定性の問題が正面から取り上げられることはほぼなかったと言ってよいが、このような観点は名詞句やそれに付随する連体修飾要素の分析に有効であると考え、従来の英語における分析によれば、文中における普通名詞句の解釈は、「法演算子(modal operator)」の有無や述語が個体(individual)について叙述を行っているか、場面(stage)について叙述を行っているかという点によって、不特定の(nonspecific)な解釈であるか特定の(specific)な解釈であるかが決定されるとされてきた。しかし、そのような分析をそのまま日本語に当てはめることはできない。本稿では、日本語における言語事実の観察をもとに分析を加え、名詞句が不特定のに解釈されるためには、命題の真偽値を決定するにあたって、何らかの認識主体の心内世界が参照されていなければならないと主張する。

筆者は、三好(2017)において、「内包性」という概念を用いながら、従来から指摘されてきた意味的な曖昧性のある言語的環境を大きく「外延的文脈／内包的文脈」の2つに整理し、内包的文脈においては、連体修飾要素が特殊な振る舞いを見せるという点を確認した。しかし、そのような曖昧性(ambiguity)がどのような要因によりもたらされ、具体的にどのようなタイプの述語と対応関係を持つのかという点については、十分に論じることができなかった。そこで、本稿では、より一般的な特定性という概念を通じて現象を記述していく。

本稿は、以下のような構成となっている。2節で本稿における「特定性」を規定したうえで、先行研究の分析と問題点を指摘する。続く3節で、名詞述語、形容詞述語、動詞述語の順に、不特定解釈をもたらし環境、および本稿の一般化の例外を明らかにする。最後に、4節でまとめと今後の課題を述べる。

2. 前提および先行研究

2.1. 本研究における「特定性」

本稿は、日本語における名詞句の特定性の問題を扱った論考であるが、管見の限り、日本語研究において特定性という概念は必ずしも自明のものではない¹。そこで、まず本稿における特定性という概念がいかなるものであるのかという点について確認しておきたい。

Jackendoff (1972 : 286) によれば、名詞句の特定解釈は、「名詞句の参与する事態が現実世界において実現しており、参与者の指示対象が明らかな文脈」か、「現実世界において実現していない事態の参与者であっても、名詞句そのものによって指示対象が明らかな文脈」において可能になる。一方、不特定解釈は、「現実世界において実現していない事態の参与者について、その指示対象が名詞句そのものによって明らかにされない文脈」においてもたらされる。これは言い換えれば、特定解釈において、名詞句によってその指示対象が唯一的に決定できるのに対し、不特定解釈においては、名詞句によって指示対象が唯一的に決定できないということであると考えられる。特定解釈と不特定解釈の具体例として、次のような例が挙げられる（以下、特に断りのない場合、例文は全て筆者の作例である）。

- (1) a. アイドルが歌っている。
- b. 花子は太郎が歌っているのを想像した。
- c. 花子はアイドルが歌っているのを想像した。

(1a) は「現実世界において実現した事態」の例であり、この場合の主語名詞句「アイドル」は、「あるアイドルが歌っている」のように、特定解釈を受ける。また、(1b) の「太郎が歌っている」という命題（節）は「想像した」という非実現性を含意する述語の項になっているため、「現実世界において実現していない事態」となっているが、項となった固有名詞「太郎」そのものによって名詞句の指示対象が明らかになっているため、こちらも特定解釈となっている。一方、同様の文脈（1c）において、普通名詞「アイドル」は、それ自体で名詞句の指示対象を明示することが困難であるため、唯一的に指示対象の定まらない不特定解釈が最も自然な解釈である。このことは、次のような対立によっても確認することができる。

- (1') a. #アイドルが誰であれ歌っている。²
 b. *花子は誰であれ太郎が歌っているのを想像した。
 c. 花子は誰であれアイドルが歌っているのを想像した。

(1') は、(1) に「誰であれ」という量化成分を加えた文である。このような環境において、(1'a) は意味的に不自然であり、(1'b) は文法的に容認できない。それに対し、(1'c) は操作前の文とほとんど意味を変えることなく解釈することが可能である。これは、「誰であれ」という成分が、対象を唯一的に決定せず、「名詞句で表示された属性を有しているものであれば対象を問わず」という不特定解釈をもたらすため、特定解釈とは馴染みにくいからであると考えられる。また、(1'b) と (1'c) の対立で示されるように、固有名詞などの個体を表す名詞句には原則として不特定解釈が存在しないことから、名詞句の特定性について観察するためには、裸普通名詞を観察することが重要であることが分かる。

なお、特定解釈と不特定解釈に関して注意しなければならないのは、不特定解釈を得るためには一定の構文的な制約がかかるが、特定解釈については、(文脈上の制約はあっても) 基本的に構文上の制約はないという点である。例えば、(1c) 「花子はアイドルが歌っているのを想像した」における「アイドル」は、語用論的に不特定解釈が優勢であるものの、「あるアイドルがおり、花子は(その)アイドルが歌っているのを想像した」というような特定解釈をすることも不可能ではない。つまり、不特定解釈が可能な環境では、名詞句は常に不特定解釈と特定解釈で曖昧 (ambiguous) なのである。以下、説明の便宜のため、不特定解釈が可能な文については特に特定解釈に言及しないが、これはその文に特定解釈が存在しないことを意味するわけではない。

以上の指摘を踏まえ、本稿では、「特定／不特定」という概念を、次のような意味合いで用いる。

(2) a. 特定解釈

名詞句が指示的機能を担っており、文脈上その指示対象を唯一的に決定することができる解釈。

b. 不特定解釈

名詞句が記述的機能を担っており、文脈上その指示対象を唯一的に決定することができない解釈。

上記のような定義は、武田 (1979 : 3-4)、東 (1982 : 88-89)、建石 (2017 : 3) などに見られる規定と、基本的には同趣旨のものである。ただし、(2) のような規定にまったく問題がないというわけではない。例えば、(2) の規定では、英語等の言語で重要視される「定性 (definiteness)」についてはまったく言及していない。一般的に、「特定／不特定」の対立は定 (definite) ではなく不定 (indefinite) の名詞句についてのみ問題にされるため、英語等の他言語との並行性を優先するのであれば、日本語においても厳密に不定の環境のみを対象にすべきということになるだろう³。しかし、日本語においては定性を担う体系的な文法範疇が存在せず、必ずしも「定／不定」の区別が明瞭ではない。この点を踏まえ、本稿では名詞句の定性は問題にせず、特定性のみ絞って議論を進める。従って、「誰であれ／何であれ」が挿入可能であれば、総称解釈、複数解釈などはいずれも不特定解釈と見なされる。

2.2. 先行研究

述語の意味的性質と名詞句の解釈を結びつけようという試みは、古くから海外の研究において盛んであり、言語哲学的な研究を背景としたさまざまな分析が存在する (本稿の議論に関係する英語を対象とした論考として、Donnellan (1966)、Partee (1972)、Palacas (1977)、武田 (1979)、東 (1982) などが挙げられる)。ここでは、本稿の分析とも関連の深い Jackendoff (1972) および Carlson (1980) の研究、さらに日本語における叙述類型論の研究を取り上げる。

議論の都合上、まず Carlson (1980) との関わりについて述べる。Carlson (1980 : 105-106) によれば、述語は個体について述べる個体レベル述語 (individual-level predicate) と場面について述べる場面レベル述語 (stage-level predicate) に分けられる⁴。そして、個体レベル述語の項となった裸複数名詞句 (bare plural noun phrase) は総称解釈に、場面レベル述語の項となった裸複数名詞句は存在解釈になるとされる。

- (3) a. *Dogs are intelligent.*
 b. *Dogs are available.* (Carlson 1980 : 78)

“*intelligent*” という個体レベル述語を伴う (3a) の “*Dogs*” が「すべての犬」という総称的な解釈になるのに対し、“*available*” という場面レベル述語を伴

う (3b) の “Dogs” は「ある複数の犬」という存在的な解釈になるとされる。すなわち、述語の意味的な性質が、項となった名詞句の「総称解釈／存在解釈」と対応関係にあると言えるのである。

単複という文法範疇を持たない日本語においては、裸名詞句によって「特定の複数の」という解釈を得ることは難しいものの、「総称解釈／存在解釈」の対立は、おおむね不特定解釈と特定解釈に対応するといってよい。しかしながら、上述のような一般化をそのまま日本語に当てはめることはできない。

- (4) a. 学生はスポーツ選手だ.
- b. 老人は医者だ.
- (4') a. *学生は珍しくスポーツ選手だ.
- (cf. 学生は珍しく男前だ.)
- b. *老人は珍しく医者だ.
- (cf. 老人は珍しく軽装だ.)
- (4'') a. #学生は誰であれスポーツ選手だ.
- b. #老人は誰であれ医者だ.

(4) においては、「スポーツ選手だ／医者だ」という個体レベル述語が用いられており、(4') のように「珍しく」などのような場面を限定する要素と共起できないことからそのことが確認できる。(4) は、主題要素を固有名詞や限定詞（「その／あの／この」など）付き名詞などの定名詞句で示すという一般的な表現類型に従っていないため、一見するとやや不自然な印象を受ける日本語話者もいるかもしれない。しかし、(4) を容認可能な文と見なした場合、「ある学生はスポーツ選手だ／ある老人は医者だ」のような特定解釈だけが認められ、「すべての学生はスポーツ選手だ／すべての老人は医者だ」のような総称的（不特定の）解釈として読むことは難しいであろう。この点は、(4'') に示したように、「誰であれ」という要素を付加することができないことから確かめられる。以上の事実は、「個体レベル述語／場面レベル述語」という対立のみによって、日本語名詞句の文中における特定性を捉えることは難しいということを示している⁵。

加えて、この点は Jackendoff (1972) の分析においても問題になると考えられる。Jackendoff (1972: 292) は不特定解釈の成立に「法演算子 (modal operator)」⁶ という標識が関与していると分析するが、次のような文と (4) と

の間にモーダルな差異が存在するかどうかは、慎重な検討を要する。

- (5) a. 学生は怠け者だ.
- b. 老人は物知りだ.
- (5') a. 学生は誰であれ怠け者だ.
- b. 老人は誰であれ物知りだ.

(5) は (4) と同様の名詞述語文であり、形式的には同一のモダリティを有しているように思われる。しかし、(5') に示したように、(5) は不特定解釈を問題なく容認する。(4) と (5) に見られる叙述の差異は必ずしも自明のものではないため、「法演算子」あるいは「非現実性」の内実を捉えなおす必要があるだろう。

一方、日本語研究においても、益岡 (1987, 2000)、益岡 (編) (2008)、影山 (編) (2012) 等によって展開されている叙述類型論の中で、述語と文全体の解釈の相互作用について分析が進められている。佐久間 (1941: 152) が提案した「物がたり文／品さだめ文」という区別に端を発する叙述類型論においては、「属性叙述」と「事象叙述」の対立が重視されており、それぞれ Carlson (1980) の「個体レベル (述語)」, 「場面レベル (述語)」という概念と関係が深い。

- (6) a. 日本は島国だ.
- b. 子供がにっこり笑った. (益岡 (編) 2008: 4-5)

(6a) が属性叙述の例、(6b) が事象叙述の例である。「島国だ」という叙述は、特定の時空間において成立するものではなく、テンス等の文法的意味の対立は薄い。一方で、「笑う」のような叙述は特定の時空間内において成立し、動作の内的な展開等を文法範疇によって表現することができる。これらの叙述は、前者が個体の属性について述べている点で場面レベル述語と、後者が特定の場面について述べている点で場面レベル述語と関連していると考えることができる⁷。

叙述類型論と名詞句との関わりという点では、日本語の豊富な主題標識との対応関係に注目した研究が進められており、(6) においても、主語が「は」で標示される属性叙述 (= (6a)) と、「が」で標示される事象叙述 (= (6b)) と

いう対立が見られる。この他にも、属性叙述を専門に担う複合助詞の存在など、主題標識についてはいくつかの興味深い事実が明らかにされている（岩男 2008, 益岡 2012 など）。しかし、主題標識等によって取り上げられた名詞句そのものがどのような解釈を受けているのかという点については、それほど関心が払われていないように思われる。確かに、日本語のように、名詞句に形態的な情報が乏しい言語においては、名詞句そのものの解釈について議論することはそれほど容易ではない。一方で、文が表す命題の内容を解釈するに伴い、日本語の名詞句も何らかの言語的情報によって文中における解釈が決定されているはずである。そして、定性や単複といった範疇に頼ることができないとすれば、主節述語を中心とする文脈情報によって「特定／不特定」といった名詞句の解釈が決定されると考えざるをえない。名詞句の解釈と述語の意味的性質に関するこのような論点は、日本語における名詞句解釈の根幹に関わる問題であるにもかかわらず、日本語学分野においてほとんど取り上げられていないと考えられる。

以上のような先行研究の検討を踏まえ、本稿では名詞句の「特定／不特定」という解釈がどのような要因によりもたらされ、具体的にどのようなタイプの述語と対応関係を持つのかという点を明らかにしていく。分析に際しては、以下の2点をあらかじめ断っておきたい。

1点目は、本稿で分析の対象とする名詞句についてである。連体修飾要素を伴った名詞句は、付加された連体修飾要素によって特定解釈がもたらされる場合があるため、本稿では（連体修飾要素を伴わない）裸名詞句のみを対象とする。また、それ自体が項を持つと考えられる「家／友達／手／顔／社長／会員／原因／結果」といったような名詞（いわゆる相対名詞（奥津 1974）や非飽和名詞（西山 1990）と呼ばれる名詞）は、形式的に連体修飾要素がなかったとしても、聞き手が潜在的に何らかの項を補ってしまう可能性が高いため、同様に分析の対象から外す。

- (7) a. 学生は立派だ。
- b. そこを歩いている学生は立派だ。
- c. 社長は立派だ。

(7a) は不特定の解釈可能であるにもかかわらず (7bc) が容易に特定解釈に傾くのは、連体修飾要素や主語名詞句の語彙的性質によると考えられる。こ

のような要因を極力排除し、名詞句と述語の關係に絞って現象を観察していく。

2点目は、文法的解釈に関連する問題である。Jackendoff (1972) が指摘するように、名詞句の特定性は、それが参与する事態の実現性に関与している。そして、事態の実現性は、述語が担う様々な文法範疇によって容易に変化する。

- | | | | |
|-----|----|------------------|-----------------|
| (8) | a. | 学生が昨日この道を通った. | 〈過去〉: 特定解釈 |
| | b. | 学生がこの道を通っている. | 〈現在〉: 特定解釈 |
| (9) | a. | 私は学生にこの道を通ってほしい. | 〈非現実〉: 不特定解釈が可能 |
| | b. | 学生が明日この道を通る. | 〈未来〉: 不特定解釈が可能 |
| | c. | 学生はこの道を通れる. | 〈可能〉: 不特定解釈が可能 |
| | d. | 学生はこの道を通らなかった. | 〈否定〉: 不特定解釈が可能 |
| | e. | 学生は毎日この道を通る. | 〈総称〉: 不特定解釈が可能 |
| | f. | 学生はこの道を通りますか. | 〈疑問〉: 不特定解釈が可能 |

(8ab) は既に確定した事態であるので、「学生」は原則として特定のであるが、Jackendoff (1972) が指摘した (9) のような環境の場合、「学生」は必ずしも特定解釈とはならない。これは、アスペクト・テンス・ムードや肯否といった広義の非実現性に関わる文法的解釈が変化することで、不特定解釈を容認する素性を述語が獲得しているからであると考えられる。

このような、文法的解釈によってもたらされる名詞句の特定性について明らかにすることは、本研究の目的に照らして極めて重要なことである。しかし、(4) と (5) の対立で示したように、アスペクト・テンス・ムード解釈が同じ条件であっても、項となった名詞句の特定性が異なる場合が存在するため、これらの文法範疇は例文において一貫させておくべきであろう。加えて、述語と文法範疇の問題を並行して扱うことは、特定性がどの要因によって決定されているのかを不明確にしてしまうおそれもある。従って、今回はアスペクト・テンス・ムードといった文法範疇によってもたらされる広義の非現実事態を含む文は考察の対象から外し、別の機会に改めて論じることとしたい。

3. 現象の観察

以下、本稿では文中で項となった名詞句の「特定／不特定」の解釈がどのような述語の意味的性質によって決定されるのかを具体的に観察していく。議論

の都合上、まずは名詞述語文を取り上げ⁸、その後、形容詞述語文、動詞述語文の観察を行う。

3.1. 名詞述語文と名詞句の特定性

先にも述べたように、英語における述語の意味的な性質と名詞句の解釈との関係を扱った Carlson (1980) によれば、個体レベル述語と共起した裸複数名詞句は総称的な解釈となるはずである⁹。しかし、実際にはそのような一般化に反する例が存在する。

- (10) a. 学生はスポーツ選手だ.
 b. 老人は医者だ. (4) の再掲
 c. 壁画は世界遺産だ.
 d. 宝石は本物だ.
- (10') a. #学生は誰であれスポーツ選手だ.
 b. #老人は誰であれ医者だ. (4') の再掲
 c. #壁画は何であれ世界遺産だ.
 d. #宝石は何であれ本物だ.

上記の例において、(10) の文は「スポーツ選手だ／医者だ／世界遺産だ／本物だ」といった個体レベル述語が表れているにも関わらず、主語名詞句を不特定の解釈することは難しい。このことは、当該の文に「誰であれ／何であれ」を補った (10') が意味的に不自然、ないし元の文と異なった解釈となっていることから確認できる。

一方で、特定の個体レベル述語の項となった場合に、叙述の実現性に違いが見られないように思われるのにもかかわらず、名詞句が不特定の (総称的) に解釈されるのも事実である。

- (11) a. 学生は怠け者だ.
 b. 老人は物知りだ. (5) の再掲
 c. 壁画は芸術だ.
 d. 宝石は高級品だ.
- (11') a. 学生は誰であれ怠け者だ.
 b. 老人は誰であれ物知りだ. (5') の再掲

- c. 壁画は何であれ芸術だ.
- d. 宝石は何であれ高級品だ.

「怠け者だ／物知りだ／芸術だ／高級品だ」といった述語が現れている (11) の例は、もちろん文脈次第で特定解釈を得ることが可能であるが、不特定解釈も問題なく容認される。(11') に示したように、先ほどの例では不適切な解釈しか得られなかった「誰であれ／何であれ」と共起可能である点でも、不特定解釈が問題なく容認されることが分かる。

以下、(10) のように項となった名詞句に対し特定解釈しかもたらさない叙述を〈特定叙述〉, (11) のように不特定解釈をもたらしうことが可能な叙述を〈不特定叙述〉と呼び、上記の問題に取り組んでいくこととしたい。このような対比を見せる述語には、典型的には以下のような例が挙げられる。

(12) a. 特定叙述をもたらしう名詞述語

人への叙述：医者だ／宇宙飛行士だ／会社員だ／学者だ／記者だ／国内出身だ／スポーツ選手だ／登山家だ／日本人だ／ピアニストだ…

物への叙述：映画館だ／高層ビルだ／国産だ／水族館だ／正規品だ／中古品だ／世界遺産だ／本物だ／マンションだ／木製だ／郵便局だ…

b. 不特定叙述をもたらしう名詞述語

人への叙述：遊び人だ／演技派だ／勤勉家だ／苦労人だ／秀才だ／努力家だ／怠け者だ／人気者だ／物知りだ／優柔不断だ／楽道家だ…

物への叙述：遊び場だ／芸術だ／高級品だ／日用品だ／必須だ／楽園だ…

これらの名詞述語の特徴を観察していく。まず、(12a) の述語には、「医者だ／学者だ」、「映画館だ／水族館だ」といった社会的地位や施設等が含まれる。これらの述語によってもたらされる属性は、原則として誰にとっても一定の対象について成立する絶対的なものであり、ある人が「医者」であれば、それは誰にとっても「医者」であり、ある建物が「映画館」であれば、それは誰

にとっても「映画館」である。一方、(12b)の述語には、「勤勉家だ／物知りだ」、「芸術だ／日用品だ」といった人や物への評価等が含まれる。これらの述語が表す属性は、必ずしも一定の対象について常に成り立つとは限らない相対的なものであり、ある人にとっての「勤勉家」や「芸術」が他の人にとってもそうであるとは限らない¹⁰。これは、名詞述語に形容詞性を備えたものとそうでないものがあるということであり、事実、形容詞は前者(＝(12b)の述語)と同じような振る舞いを見せるが、その点については次節で述べる¹¹。

以上のような事実は、次のように言い換えることができる。すなわち、特定叙述をもたらす(12a)の述語による叙述は、現実世界¹²のみを参照することによって真偽値が確定できるのに対し、不特定叙述をもたらす(12b)の述語による叙述は、何らかの認識主体の心内世界を参照しなければ真偽値が確定できないということである。そこで、本稿では、不特定叙述が成立するためには、以下のような意味的制約が働いていると主張する。

(13) 不特定叙述の成立条件

ある述語の項となった名詞句が不特定解釈を受けるためには、当該の述語による叙述の真偽値を決定するにあたって、何らかの認識主体の心内世界が参照されていなければならない。

(13)の規定は、Jackendoff (1972) が示した不特定解釈と法演算子との関係を発展させたものである。(12b)のような述語は、従来の意味におけるモーダルな意味(非現実性)を持っていないのにもかかわらず、不特定叙述が可能である。このような述語の振る舞いを取り込むためには、非現実性や存在の前提ではなく、心内世界を経た叙述であるかどうかという点が重要であると考えられる。

以上の主張は、次のような名詞句の振る舞いによっても裏付けられると考えられる。

- (14) a. 私にとって、学生は誰であれスポーツ選手だ。
 b. 私にとって、老人は誰であれ医者だ。
 c. 私にとって、壁画は何であれ世界遺産だ。
 d. 私にとって、宝石は何であれ本物だ。
- (15) a. 私にとって、学生は誰であれ怠け者だ。

- b. 私にとって、老人は誰であれ物知りだ.
- c. 私にとって、壁画は何であれ芸術だ.
- d. 私にとって、宝石は何であれ高級品だ.

(14) は、先の (10) に「にとって」という、心内世界を参照したうえでの叙述であることを示す要素を付加した文である。興味深いことに、操作前には特定解釈以外が困難であった名詞句が、これらの例では「誰であれ／何であれ」といった要素と違和感なく共起可能となっており、いずれも不特定の解釈可能となっている。加えて、名詞句の特定性に変化が見られる (14) に対し、(15) ではほとんど意味的な変化が見られない。このことは、(12b) の述語による叙述において、何らかの認識主体の心内世界を参照することが可能であるという本稿の主張と整合的である。

また、次のような比喩を用いた叙述における名詞句の振る舞いも、本稿における主張の傍証となる。

- (16) a. 学生は誰であれ (まるで) スポーツ選手のようだ.
- b. 老人は誰であれ (まるで) 医者 of ようだ.
- c. 壁画は何であれ (まるで) 世界遺産のようだ.
- d. 宝石は何であれ (まるで) 本物のようだ.
- (17) a. 学生は誰であれ (まるで) 怠け者のようだ.
- b. 老人は誰であれ (まるで) 物知りのようだ.
- c. 壁画は何であれ (まるで) 芸術のようだ.
- d. 宝石は何であれ (まるで) 高級品のようだ.

(16) と (17) は、(10) に「のようだ」といった比喩を表す形式を付加した例である。これらの文においては、述語の意味的な性質に関係なく、項となった名詞句を不特定の解釈することができる。このような事実は、本稿の分析によって次のように説明できる。比喩はある種の“看做し”であり、信念を通じて実際には起こっていない叙述を実現させる操作であるため、必ず何らかの認識主体における心内世界を参照しなければ真偽値が確定しない。このように、述語が心内世界を参照するという特性を獲得するために、項となった名詞句に対し不特定解釈が可能になるのだと考えられる¹³。

では、なぜ現実世界のみを参照ただけで命題の真偽値が確定できるかどうか

かという点が、項となった名詞句の特定性を決定するのだろうか。これはおそらく、真偽値の確定に際し、現実世界の事実関係によって真偽値が確定できる、あるいは現実世界の事実関係を参照しなければならない命題は、必然的に項となった名詞句が現実世界に対応物を持つことになるからであると考えられる。現実世界に対する叙述においては、名詞句に対応する特定の指示対象が存在するのが普通であり、直接見聞きすることのできない不特定の対象に対して言及することは、むしろ有標な叙述形態である¹⁴。このような要因により、命題の真偽値の決定に際し現実世界を参照するかどうかという点が、項となった名詞句の特定性と結びついているのであると考えられる（同様の指摘は Jackendoff (1972 : 286) にも見られるが、本稿は非現実性ではなく認識主体の存在を強調する点で異なる）。

(13) のような主張によって問題となるのは、具体的にどのような述語と結びついた場合に認識主体の心内世界が参照されていないのかという点であろう。名詞述語文については典型例を (12) に挙げたが、形容詞述語文、動詞述語文についても、この点について自明であるとは言えない。次節から、形容詞述語文、動詞述語文の場合について見ていく。

3.2. 形容詞述語文と名詞句の特定性

Carlson (1980 : 105-106) は、形容詞述語について、先述した場面レベル述語と個体レベル述語の区別が存在し、場面レベル述語の場合には存在解釈（特定解釈）に、個体レベル述語の場合には総称解釈（不特定解釈）になるとされる。しかし、Carlson (1980 : 70-72) も指摘するように、場面レベル述語は不特定解釈を容認することがある。加えて、日本語の場合、裸名詞句は個体レベル述語の項になった際にも特定解釈となることがあるため、形容詞述語が場面レベル述語であるか個体レベル述語であるか（一時的属性であるか恒常的属性であるか）という点は、特定叙述および不特定叙述の成立と直接の対応関係にはないと言える。

- (18) a. 学生は騒がしい.
- b. 老人は博識だ.
- (18') a. さっきから学生は騒がしい.
- b. *さっきから老人は博識だ.
- (18'') a. 学生は誰であれ騒がしい.

b. 老人は誰であれ博識だ.

(18') に示したように、「騒がしい」と「博識だ」では、後者の方が個体レベル述語（恒常的属性）であるということになるが、(18'') のように、いずれも不特定解釈が可能であるという点では同じである。また、個体レベル述語が用いられていると考えられる (18b) においても、「ある老人がいて、(その) 老人は博識だ」というような、特定解釈が可能である¹⁵。なお、(18') と (18'') はそもそも時間限定性が異なる構文であるという批判もありうるが、(18'a) においても「学生」を「さっきから学生は誰であれ騒がしい」のように不特定の解釈することは可能であろう。従って、場面レベル述語と個体レベル述語の区別は、不特定叙述の成立には直接的に関与しないと考えられる。

このような観察を踏まえ、本稿では、形容詞述語と項となった名詞句の関係においても、(13) の主張が有効であると主張する。先に結論を述べると、形容詞述語文の場合、項となった名詞句は原則として不特定解釈が可能（すなわち、不特定叙述が可能）である。先にも触れたが、これは、名詞述語の中でも不特定叙述が可能なタイプのものと同質の振る舞いを形容詞が見せるということである。ただし、1つの項しか持たない形容詞（以下、一項形容詞）に対し、2つの項を持つ形容詞（以下、二項形容詞）の場合にはやや状況が異なる。大まかな見通しとしては、一項形容詞は名詞述語に、二項形容詞は動詞述語に近い振る舞いを見せると言えるが、以下、形容詞述語と名詞句の特定性との関係を詳しく観察していく。

まず、一項形容詞から取り上げる¹⁶。

(19) 一項形容詞述語¹⁷

属性形容詞：赤い／偉大だ／おいしい／格好いい／貴重だ／騒がしい
 ／四角い／静かだ／素敵だ／頼もしい／小さい／長い／
 情けない／賑やかだ／博識だ／ハンサムだ／深い／丸い
 ／優しい／優秀だ…

感覚形容詞：温かい／痛い／かゆい／寒い／涼しい／つらい／苦しい
 ／冷たい…

(20) a. 警察官は格好いい.

b. じゃがいもは丸い.

- c. スープは温かい.
 - d. 風邪はつらい.
- (20') a. 警察官は誰であれ格好いい.
- b. ジャがいもは何であれ丸い.
 - c. スープは何であれ温かい.
 - d. 風邪は何であれつらい.

一項形容詞には、(19)に挙げたようないわゆる属性形容詞、感覚形容詞などと呼ばれるものが該当する。これらの形容詞述語は、(20')に示したように、いずれも不特定叙述が可能である。

では、なぜ形容詞述語はいずれも不特定叙述が可能なのであろうか。その説明には、先行研究でたびたび言及されている「評価性」という概念が重要になってくる。西尾(1972:185-186)は、「形容詞は一般に、(中略)言語主体(ないしその言語社会一般)のものごとに対する評価・価値づけの要素を含んでいることが多いといえよう」と述べている。このような、形容詞述語に評価的な意味合いが含まれているという見方は、さまざまな形で後続の研究にも受け継がれていると言えるが、「評価性」という概念が項となった名詞句の特定性と結びつけられることはなかった。他方、本稿の立場からすれば、形容詞の「評価性」とは、「当該の述語による叙述の真偽値を決定するにあたって、何らかの認識主体の心内世界が参照されていなければならない」という特徴の現れ方の一つ、ということにほかならない。一般に、評価的な意味合いが薄いとされる「赤い／丸い」などの属性形容詞(cf. 西尾 1972:186 など)であっても、これらの叙述が相対概念であることには変わりなく、認識主体の心内世界を参照しなければ真偽値が確定できないという点で、他の形容詞述語と本質的な違いはないと言ってよい¹⁸。これらの形容詞は、項を1つしか持たないが、潜在的な認識主体を持っているために、不特定叙述が可能になるのである。このことは、名詞述語の場合と同様、「にとって」という要素を補うことで確かめられる。

- (21) a. 私にとって、警察官は格好いい.
- b. 私にとって、ジャがいもは丸い.
 - c. 私にとって、スープは温かい.
 - d. 私にとって、風邪はつらい.

- (21') a. 私にとって、警察官は誰であれ格好いい。
 b. 私にとって、じゃがいもは何であれ丸い。
 c. 私にとって、スープは何であれ温かい。
 d. 私にとって、風邪は何であれつらい。

(20) と (20') に「私にとって」という要素を補った (21) と (21') は、いずれも操作前の文からほとんど意味が変わっていない。これは、(12a) に挙げた名詞述語（不特定叙述をもたらす名詞述語）と並行的な特徴であり、形容詞述語に潜在的な認識主体がいることの傍証となるだろう。

続いて、二項形容詞を見ていくが、認識主体の心内世界を参照しなければ真偽値が確定せず、不特定叙述が可能であるという特徴は、基本的に一項形容詞の場合と同じである。二項形容詞は、典型的には次のような感情形容詞が該当する。

(22) 二項形容詞述語

感情形容詞：嬉しい／面白い／悲しい／嫌いだ／悔しい／恋しい／好きだ／楽しい／懐かしい／憎い／恥ずかしい／難しい…

- (23) a. 学生は紙飛行機が懐かしい。
 b. 老人はプレゼントが嬉しい。
 (23') a. 学生は何であれ紙飛行機が懐かしい。
 b. 老人は何であれプレゼントが嬉しい。
 (23'') a. # 学生は誰であれ紙飛行機が懐かしい。
 b. # 老人は誰であれプレゼントが嬉しい。

二項形容詞は、いわば一項形容詞において潜在化していた認識主体が顕在化した形容詞述語であると言える。この場合、感情の対象となる名詞句は不特定解釈が可能であるが、認識主体そのものの不特定解釈はやや困難である。(23) の例でいえば、感情の対象である「紙飛行機／プレゼント」は不特定解釈となるが、認識主体（経験主）である「学生／老人」は不特定解釈が難しい。この点は、次のように述語を過去時制にした場合により鮮明になる。

- (24) a. 学生は紙飛行機が懐かしかった。

- b. 老人は贈り物が嬉しかった.
- (24') a. 学生は何であれ紙飛行機が懐かしかった.
- b. 老人は何であれプレゼントが嬉しかった.
- (24'') a. # 学生は誰であれ紙飛行機が懐かしかった.
- b. # 老人は誰であれプレゼントが嬉しかった.

(24') に比べて、(24'') は明らかに不自然であるか、操作前の文の意味から離れている（一項形容詞の例である (20') は、過去時制にしても容易に不特定解釈ができる点に注意されたい）。このような事実から、仮に (24'') のような例において認識主体が不特定の解釈できたとしても、述語のアスペクト・テンス解釈によりもたらされたものである可能性が高いと考えられる。

また、「にとって」を補った際の次のような対立は、二項名詞句の経験主が、不特定叙述における認識主体であることを強く示唆するものである。

- (25) a. 学生にとって、紙飛行機は懐かしい.
- b. 老人にとって、プレゼントは嬉しい.
- (26) a. *私にとって、学生は紙飛行機が懐かしい.
- b. *私にとって、老人はプレゼントが嬉しい.

(25) に示したように、(23) における経験主「学生／老人」に「にとって」を付加した (25) は自然である。それに対し、同じ文へさらに「私にとって」という要素を付加すると、文法的に容認できなくなってしまう。これは、形容詞述語文において「にとって」で示される要素が、単なる付加詞ではなく、何らかのレベルで必須項として機能していることを示している。

このような事実から、二項形容詞において経験主が不特定解釈を受けない理由も自然に説明される。すなわち、二項形容詞述語による叙述において、対象語となる名詞句は経験者主語の心内世界を参照しなければ真偽値が確定しないのに対し、経験者主語それ自体は、いかなる認識主体の心内世界にも捉えられていないために、不特定解釈とはならないのである。このような二項形容詞述語の特徴は、動詞述語における不特定解釈の状況と近いところがあるが、動詞述語については次節で改めて述べる。

以上、形容詞述語と項となった名詞句の特定性との相関について見てきた。本節の最後に、「好きだ／嫌いだ」という形容詞述語を取り上げておきたい。

二項形容詞の中でも、「好きだ／嫌いだ」は認識主体となる名詞句に対して不特定解釈が可能である点で例外的である。

- (27) a. 学生は学校が嫌いだった。
 b. 老人は懐中時計が好きだった。
 (27') a. 学生は何であれ学校が嫌いだった。
 b. 老人は何であれ懐中時計が好きだった。
 (27'') a. 学生は誰であれ学校が嫌いだった。
 b. 老人は誰であれ懐中時計が好きだった。

これは、「好きだ／嫌いだ」という形容詞が、経験主（(27) では「学生／老人」）の感情であると同時に、経験主に対する話し手の叙述にもなっているからであると考えられるが¹⁹、詳細はなお検討の余地がある。今のところ十分な議論をする用意はないため、機会を改めて取り上げたい。

3.3. 動詞述語文と名詞句の特定性

続いて、動詞述語文とその項となった名詞句の特定性について観察していく。Carlson (1980) などの先行研究によれば、動詞述語は基本的に場面レベル述語として位置づけられるので、その項となった名詞句は存在解釈（特定解釈）を受けることになる。

確かに、動詞によって叙述される命題は、モダリティなどの文法的な要素が付加された場合を除き、原則として一つの可能世界（典型的には現実世界）を参照するだけで真偽値が確定しうるものである。従って、動詞の項となった名詞句には、特定解釈となる傾向があるのは事実である。以下に典型的な例を挙げる。

(28) 特定叙述をもたらず動詞述語²⁰

非対格動詞：ある／落ちる／回復する／切れる／壊れる／死ぬ／滑る
 ／育つ／倒れる／散る／冷える／曲がる／盛り上がる／
 揺れる／割れる…

非能格動詞：歩く／行く／通う／さわぐ／座る／出かける／鳴く／逃
 げる／走る／働く／訪問する／面会する／潜る／休む／
 練習する…

他 動 詞：埋める／送る／借りる／壊す／叱る／救う／食べる／作る／殴る／煮る／励ます／拾う／まとめる／持つ／容認する／渡す…

- (29) a. 街路樹が車道に倒れた.
 b. サラリーマンが椅子に座った.
 c. 男が窓ガラスを壊した.
 (29') a. # 何であれ街路樹が車道に倒れた.
 b. # 誰であれサラリーマンが椅子に座った.
 c. # 誰であれ男が窓ガラスを壊した.
 (29'') a. # 街路樹が何であれ車道に倒れた.
 b. # サラリーマンが何であれ椅子に座った.
 c. # 男が何であれ窓ガラスを壊した.

(29') (29'') に示したように、一回性の事象を叙述する動詞述語文の項となった名詞句は、「誰であれ／何であれ」といった要素のよってもたらされる不特定解釈とは馴染まない。

このように、動詞述語文の項となった名詞句は、多くの場合、特定解釈と結びついている。しかし、Carlson (1980 : 113) も指摘するように、動詞述語は、不特定解釈と一切結びつかないわけではない。以下のように、一部の他動詞述語の項となった名詞句は、不特定解釈が可能なのである。

- (30) a. 学生は今しがたアフリカゾウを想像した.
 b. 老人は今しがた歯医者进行を思い浮かべた.
 (30') a. 学生は何であれアフリカゾウを想像した.
 b. 老人は誰であれ歯医者进行を思い浮かべた.
 (30'') a. # 誰であれ学生はアフリカゾウを想像した.
 b. # 誰であれ老人は歯医者进行を思い浮かべた.

(30) における時間副詞的な要素との共起からも明らかなように、「想像する／思い浮かべる」という動詞述語は、一定の時空間内において生じる一回性の事象について叙述を行っている。にもかかわらず、(30') のように、対格の名詞句は不特定解釈を受けている。なお、認識主体（動作主）は原則として特

定的に解釈されるが、こういった点に、二項形容詞の場合との類似点が見受けられる。

このような振る舞いを見せる述語は、典型的には、伝統的に言語哲学や形式意味論の分野でいわゆる「内包的他動詞」あるいは「指示的に不透明な文脈」をもたらす述語と見なされてきた述語である。これらの述語の目的語となった名詞句は、冠詞を伴っていても「特定／不特定」解釈の間で意味的に曖昧であり、「定／不定」の区別を持つ言語においても形態的に曖昧性を区別することができない。このように、対格名詞句に不特定解釈をもたらす述語として、以下のものが挙げられる。

(31) 不特定叙述をもたらす動詞述語

他 動 詞：愛する／祈る／思い浮かべる／思い描く／思い起こす／
期待する／好む／探し求める／信じる／想像する／想起
する／憎む／願う／望む／夢見る…

これらの述語は、動詞かつ場面レベル述語でありながら、認識主体（動作主）の心内世界を参照しなければ命題の真偽値が確定しないという性質を持っている。このことは、これらの述語が、「心の中で」という心内世界であることを明示する表現と共起しても真偽値に変化がないことから確かめられる²¹。

- (32) a. 学生はアフリカゾウを想像した.
- b. 老人は歯医者进行を思い浮かべた.
- (32') a. 学生は心の中でアフリカゾウを想像した.
- b. 老人は心の中で歯医者进行を思い浮かべた.
- (33) a. 学生はアフリカゾウを救った.
- b. 老人は歯医者进行を罵った.
- (33') a. #学生は心の中でアフリカゾウを救った.
- b. #老人は心の中で歯医者进行を罵った.

(32) の文は、本来的に認識主体の心内世界についての言及であるため、「心の中で」という要素を付加した (32') においても、「想像する／思い浮かべる」という動作は実現している。それに対し、(33) の文は、本来的には現実世界についての言及であるため、(28') のように「心の中で」という要素を

付加してしまうと、実際には実現していない事態についての叙述となってしまう。すなわち、(32) と (32') はほとんど同義と言っても差し支えないのに対し、(33) と (33') では明らかに真偽値が異なっているのである。このようなことが起こるのは、これらの述語の項となった名詞句は、認識主体の心内世界において捉えられた対象であり、必ずしも現実世界に対応する指示対象を持たないからであると考えられる。また、極めて興味深いことに、「心の中で」と共起した場合には、述語の性質とは無関係に「アフリカゾウ／歯医者」といった内項の要素を不特定の解釈することが可能になる。

- (34) a. # 学生は何であれアフリカゾウを救った。
 b. # 老人は誰であれ歯医者を罵った。
 (34') a. 学生は心の中で何であれアフリカゾウを救った。
 b. 老人は心の中で誰であれ歯医者を罵った。

(31) に挙げた動詞が持つ特徴は、まさしく本稿が提示した (13) の一般化に符合するものである。すなわち、何らかの認識主体の心内世界を参照していることによって、(31) の述語の項となった名詞句は不特定解釈が可能となっていると考えられるのである。本稿の一般化は、このように記述的妥当性を高めるだけでなく、個体レベル述語と場面レベル述語といった従来の述語分類では捉えきれなかった名詞句の解釈要因に説明を与えるものであると言える。

3.4. 例外的にもたらされる不特定性

ここまで、名詞述語文、形容詞述語文、動詞述語文において、本稿の一般化が成立しうることを見てきた。既に断ったように、本稿の分析はアスペクト、テンス、ムードといった文法範疇を限定した環境においてのみ当てはまるものであるが、一方で、そのような環境を排除しても、なお本稿の一般化が当てはまらない場合がある。以下、問題となる環境を2つ挙げておく。

1 つ目は、名詞述語文における次のようなケースである。

- (35) a. クジラは哺乳類だ。
 b. 硬貨は金属製だ。
 (35') a. クジラは何であれ哺乳類だ。
 b. 硬貨は何であれ金属製だ。

(35)における「哺乳類だ／金属製だ」という叙述は、現実世界を参照するだけで真偽値を確定させることが可能であり、本稿の予測からすれば、項となった名詞句は特定のになるはずである（「私にとって」などの要素とはなじまない）。しかし、(35')から明らかのように、これらの文の主語名詞句は、問題なく不特定のに解釈することが可能である。

このような例外は、述語名詞句が、主語名詞句が表しうる全集合を包摂している場合に生じる。上記の例でいえば、全ての「クジラ」は「哺乳類」であると言えるし、全ての「硬貨」は「金属製」である。主語名詞句が述語名詞句に包摂されている（真部分集合となっている）場合には、現実世界に関する叙述であっても、主語名詞句で表された対象の総体に言及しなければならないために、不特定叙述が成立するのだと考えられる。

2つ目は、必ずしも明確な反例というわけではないが、当該名詞句が焦点化されている場合に見られる。

(36) a. A：教員と学生、どちらが日本人なんだっけ。

B：学生が日本人だよ。

b. A：君は老人を殴ったの？

B：いいえ、私は学生を殴りました。

(36ab)の各例は、本稿において特定解釈の名詞句が現れることを予測した環境であるが、名詞句「学生」が焦点化されている。このような文脈において、話し手Bは「学生」という名詞句で特定の対象を想定している可能性が高く、「学生」は必ずしも不特定解釈であるとは言えないものの（実際、この文には「誰であれ」といった要素を付加することは難しい）、通常の特定的な名詞句とも異なっている。

特定的な名詞句の場合、名詞句は指示機能に重心をおいているため、同一の対象を支持してさえいれば、名詞句を置き換えても問題ない。

(37) a. 学生はスポーツ選手だ。（学生＝太郎）

b. 私は学生を殴りました。（学生＝次郎）

(37') a. 太郎はスポーツ選手だ。

b. 私は次郎を殴りました。

同一指示関係が保証されている限りにおいて、(37) (37') の真偽条件的意味は同じである。

一方、当該名詞句の記述的側面が焦点化されている場合には、このような置き換えはできない。

- (38) a. A : 教員と学生, どっちが日本人なんだっけ.
 B : 学生が日本人だよ. (学生=太郎)
 b. A : 君は老人を殴ったの?
 B : いいえ, 私は学生を殴りました. (学生=次郎)
- (38') a. A : 教員と学生, どっちが日本人なんだっけ.
 # B : 太郎が日本人だよ.
 b. A : 君は老人を殴ったの?
 # B : いいえ, 私は次郎を殴りました.

仮に事実関係が「学生=太郎/次郎」だったとしても、上記のような応答は不自然である。このような現象から、本稿が特定の環境においても、名詞句が記述的な機能を担うことが可能であることが分かる。こういった解釈が生じるメカニズムについては、今後明らかにしていく必要がある。

4. おわりに

本稿での主な主張は以下の通りである。

- ・従来の述語分類では、名詞句の特定性に関して、言語事実を十分に説明することができない。従って、本稿では以下のような提案を行った。

(39) 不特定叙述の成立条件

ある述語の項となった名詞句が不特定解釈を受けるためには、当該の述語による叙述の真偽値を決定するにあたって、何らかの認識主体の心内世界が参照されていなければならない。

((13) 再掲)

- ・各述語における名詞句の特定性との対応関係は、次の通りである。

名詞述語文：現実世界のみを参照することによって命題の真偽値が決定可能な叙述の場合、主語名詞句は特定のになる。ただし、述語名詞句が主語名詞句を包摂する関係にある場合には、述語の性質に関係なく不特定解釈になる。

形容詞述語文：一項形容詞の場合には、原則として主語名詞句を不特定のに解釈することが可能である。一方、二項形容詞の場合には、原則として対象語となった名詞句のみ不特定のに解釈することが可能となる。

動詞述語文：原則として動詞述語文の項となった名詞句は特定のに解釈される。ただし、信念や思考を表す述語の項となった目的語名詞句は、不特定のに解釈することが可能となる。

次の課題としては、アスペクト・テンス・ムード（モダリティ）といった文法範疇を踏まえたうえで名詞句の特定性がどのように分布しているのかを明らかにする必要があるだろう。また、本稿では名詞句の特定性と述語の意味との対応関係を記述するのみで、上述のような観点がどのような文法現象の説明に有益であるかという点については、ほとんど言及していない。これらの点については、機会を改めて論じたいと考える。

【付記】本研究はJSPS科研費 18H05575 の助成を受けたものである。

注

- 1 名詞句の指示性に関する研究としては、西山（2003）をはじめとする一連の研究があるが、指示性と特定性は独立の概念である。
- 2 例文に付された「#」は、筆者が意図した解釈ではないことを示す。以下同様。
- 3 定名詞句に対してもそのまま「特定／不特定」の概念を適用してよいかという点については、肯定的な見解と否定的な見解があるが、この問題は本稿の射程を超えるため、ここではこれ以上問題にしない。
- 4 さらに、Carlson（1980）は種レベル述語（kind-level predicate）という分類を立てているが、本稿の議論とは直接かかわらないので、ここでは扱わない。
- 5 ここで述べているのは、少なくとも日本語の裸名詞句において Carlson（1980）の一般化が部分的に適用できないということであり、冠詞や単複といった名詞句の文法範疇を持つ英語等の言語において、同様の問題が生じるとは限らない。例えば、(5a) の日本語文の解釈は、おそらく「The student is an athlete」という英語に対応し、この場合の主語は裸複数名詞句ではない。本稿はあくまでも日本語の名詞句の文中における解釈を問題にするものであるから、英語等の他

言語との対応関係については、今後の課題としたい。

- 6 法演算子として挙げられているのは、「非現実 (unrealized)」, 「未来 (future)」, 「可能 (possible)」, 「否定 (negative)」, 「複数 (multiple)」, 「総称 (generic)」, 「疑問 (wh-)」 (Jackendoff 1972 : 292) である。具体例については、本節末で挙げる。
- 7 ただし、Carlson (1980) の分類が語彙的なものであるのに対し、益岡 (1987) の分類は構文的なものであるという点で大きく異なっている。
- 8 なお、以下の議論では、原則として主語名詞句が述語名詞句の項になっていると考えられるもの (いわゆる措定文) のみを対象とし、どの名詞句が項であるのかという点について必ずしも統一した見解の得られていない「この発表は司会が学生だ」「カキ料理は広島が本場だ」のような多重主語構文、「犯人は太郎だ／太郎が犯人だ」のような倒置が可能とされる指定文、「ぼくはウナギだ」のようないわゆるウナギ文等については、ここでは取り上げないこととする (これらの名詞述語文については、西山 (2003)、西垣内 (2016) 等を参照されたい)。また、名詞述語文の場合、述語名詞句 ((10a) における「スポーツ選手だ」など) の特定性について問題にすることも不可能ではないが、本稿では述語名詞句をあくまで一項述語と見なし、その特定性については問題としない。これは、「太郎が歩いている」などの一項述語文において、動詞述語「歩く」の特定性が一般的に問題にされないというのと並行的に述語名詞句を扱うということである。
- 9 Carlson (1980) は述語名詞について次のように述べている (ただし、例文番号は改めた)。

Predicate nominals as previously noted select only ‘universal’ reading of the subject.

(i) *Dogs are mammals.*

(i) does not seem to mean that some dogs are mammals, but rather that all are mammals.

(Carlson 1980 : 104-105)

ここで「select」と述べているのは、主語名詞句の「存在／総称」解釈 (本稿における「特定／不特定」解釈) についてであり、裸複数名詞句を主語に持つ名詞述語文はすべて総称解釈 (不特定解釈) になるとされる。

- 10 研究の動機は全く異なるが、高橋 (1984 : 21) にも「種類づけ」と「性格づけ」という、同じ趣旨の区別が見受けられる。また、益岡 (2004, 2012) における「内在的属性」と「非内在的属性」の区別にもこれと類似した側面がある。ただし、時間的な限定性に基づく益岡の分類基準では、(11) のような例も内在的属性を表していると言わざるをえないため、本稿の分類基準とはやや異なると言える。
- 11 名詞述語と形容詞述語の連続性については、従来から「美人の／美人な」のような交替が可能である点からも指摘されているが、名詞句の特定性からもそのことが観察できる。
- 12 厳密にはフィクションにおける世界もこれに含まれるが、フィクション世界内部においても現実世界とそれ以外の世界の区別は存在するため、ここでは特に問題としない。
- 13 ただし、(14) (15) のような表現においては、述語によってあらわされた叙述

が現実世界において成立しないということを必ずしも含意しない一方で、(16) (17) のような比喩による叙述は、それが現実世界において成立しないということを義務的に含意するため、元の文との真偽値は一致しない。しかし、ここで問題としたいのは「比喩表現になることで、本来特定叙述しか容認しない述語の不特定叙述が可能になる」という点であり、真偽値が元の文と一致しないという比喩表現の特性は、ここでの議論の問題とはならない。

- 14 逆の見方をすれば、(12a) の述語のように叙述に際して現実世界のみを参照している場合においても、不特定の対象によって真偽値が確定できるのであれば、項となった名詞句の不特定解釈が可能になるということである。このようなケースは (13) の一般化の反例となるが、詳細は 3.4 節で述べる。
- 15 日本語においてこのような解釈が容認されるのは、冠詞や単複といった範疇が存在しないという点が密接に関わっているように思われるが、ここでは特に問題としない。
- 16 日本語の形容詞述語については、多くの分類や表現機能に関する論考があるが、定説と呼べるような枠組みが共有されているとは言えない状況にある。一方で、「属性形容詞」と「感情形容詞」の区別は、さまざまな形で比較的広く受け入れられているように思われる。また、多くの先行研究において、「評価性（主観性）」や「時間的限定性」といった概念と形容詞の意味との関係が分析されており、それらの指標を手掛かりに形容詞の分類・整理が行われている（西尾 1972, 荒 1989, 樋口文彦 1996, 山岡 2000, 八亀 2008, 村上 2017 など）。時間的限定性と特定性との関係については、Carlson (1980) の分析を通して既に確認した。評価性と特定性との関連については後述する。
- 17 このリストには、先行研究を参照しながら、なるべく典型的なものを取り上げた。注 16 でも触れたように、形容詞の分類については、必ずしも一致した見解が得られているわけではなく、(19) も便宜的なリストに過ぎない（形容詞の分類については、先に挙げた先行研究を参照されたい）。この点は、二項形容詞の場合も同じである。また、感覚形容詞については、「太郎（に）は、わさびが辛かった」のような文も不可能ではないように思われるが、やや容認度が安定しないように思われるので、ここでは一項形容詞とした。なお、感覚形容詞をどちらの形容詞に分類するかという問題は、本稿の分析に影響しない。
- 18 佐川（1999）はいくつかの統語現象を挙げて形容詞述語が常に外項を有すると分析しており、山岡（2000：112）も属性形容詞のような公共性の高い形容詞述語であっても「潜在的経験者」という主体が存在するとしている。これらの指摘は、形容詞述語の項は原則として不特定解釈が可能である（すなわち、形容詞述語は何らかの認識主体の心内世界を参照することによって真偽値が確定する）という本稿の主張とも関連するように思われる。
- 19 同様の指摘が、西尾（1972：25）にも見られる。
- 20 動詞述語についても、全ての研究者の間で分類に対する見解が一致しているわけではない。従って、ここでの「非対格動詞／非能格動詞／他動詞」という分類は、あくまでも便宜的なものであるが、このことは本稿の分析に影響しない。
- 21 当該の例文には、「学生にとって、アフリカゾウを想像した」などのように、「にとって」を付加するテストを適用することができない。これはそもそも「にとって」という要素と動詞述語文との間に共起制限があるからだと考えられる（「*

私にとって、街路樹が車道に倒れた」なども文法的に容認できない)。

【参考文献】

- 荒正子 (1989) 「形容詞の意味的なタイプ」 言語学研究会 (編) 『ことばの科学』 3, pp. 147-162, むぎ書房.
- 岩男考哲 (2008) 「「って」 提題文の表す属性と使用の広がり」 益岡隆志 (編) (2008) 『叙述類型論』, pp. 45-66, くろしお出版.
- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論一名詞句の構造一』 大修館書店.
- 影山太郎 (編) (2012) 『属性叙述の世界』 くろしお出版.
- 佐川誠義 (1999) 「日本語の形容詞の項構造について」 『法政大学文学部紀要』 45, pp. 25-38, 法政大学文学部.
- 佐久間鼎 (1941) 『日本語の特質』 育英書院, 1995 復刊, くろしお出版.
- 高橋太郎 (1984) 「名詞述語文における主語と述語の意味的な関係」 『日本語学』 3-12, pp. 18-39.
- 武田修一 (1979) 「特定性と指示性の関係について」 『英語学』 21, pp. 2-27, 開拓社.
- 建石始 (2017) 『日本語の限定詞の機能』 日中言語文化出版社.
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版.
- 西山佑司 (1990) 「「カキ料理は広島が本場だ」 構文について一飽和名詞句と非飽和名詞句一」 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』 22, pp. 169-188, 慶應義塾大学言語文化研究所.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論一指示的名詞句と非指示的名詞句一』 ひつじ書房.
- 西垣内泰介 (2016) 「「指定文」 および関連する構文の構造と派生」 『言語研究』 150, pp. 137-171.
- 東博通 (1999) 「特定性と指示性の関係についての一考察」 『鈴鹿工業高等専門学校紀要』 創立 20 周年記念号, pp. 87-95, 鈴鹿工業高等専門学校.
- 樋口文彦 (1996) 「形容詞の分類一状態形容詞と質形容詞一」 言語学研究会 (編) 『ことばの科学』 7, pp. 39-60, むぎ書房.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法一日本語文法序説一』 くろしお出版.
- 益岡隆志 (編) (2008) 『叙述類型論』 くろしお出版.
- 益岡隆志 (2012) 「属性叙述と主題標識一日本語からのアプローチ」 影山太郎 (編) (2012) 『属性叙述の世界』, pp. 91-109, くろしお出版.
- 三好伸芳 (2017) 「名詞句の「内包性」と連体修飾」 『筑波日本語研究』 21, pp. 115-136, 筑波大学大学院博士課程人文社会系日本語学研究室.
- 村上佳恵 (2017) 『感情形容詞の用法一現代日本語における使用実態一』 笠間書院.
- 八竜裕美 (2008) 『日本語形容詞の記述的研究一類型論的視点から一』 明治書院.
- 山岡政紀 (2000) 『日本語の述語と文機能』 くろしお出版.
- Carlson, Gregory N. (1980) *Reference of Kinds in English*, Garland.
- Donnellan, K. (1966) "Reference and Definite Descriptions," *Philosophical Review* 75, pp. 281-304.
- Jackendoff, Ray S. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, The Massachusetts Institute of Technology.

- Palacas, A. L. (1977) "Specificicness in Generative Grammar," in Paul J. Hopper (eds.), *Studies in Descriptive and Historical Linguistics, Festschrift for Winfred P. Lehmann*, pp. 187-208, John Benjamins B. V.
- Partee, B. H. (1972) "Opacity, Coreference, and Pronouns," in Donald Davidson and Gilbert Harman (eds.), *Semantic of Natural Language*, pp. 415-441, D. Reidel Publishing Company.